

## 仮面の脈で診誤った自律神経失調症

男性 六七歳 印刷所経営（印刷職人）

主訴 眠りが悪い、胃がムカつく

現病歴 今月の初めより現症状発現。二年前、軽い脳梗塞をやり、それ以来薬服用。現在は半年に一回、CTを撮る。特段、悪くはないそうだ。

所見 脈は治療する前、特に変わった脈でもなく、いわゆる平脈のような感じを呈し、脳梗塞後遺症が落ち着いているのだなあと思っていた。左胸鎖乳突筋緊張、行間（+）、腹証は特になし。

治療 扁桃処置、帯脈、肝実処置をしている時に再度脈をみると、なんと、普通だった脈が広がったり、緩んだりするのが、逆に尖って、緊数を呈してきた。この患者に薬の種類を聞いてみると六種類、それも日に三回も飲んでいて、この薬のために脈が正常に出ていなかったのだろう。つまり自律神経失調の症状に対する緊数という脈状に仮面を掛けていたのだ。それですぐ自律神経調整処置も加える。他に腹部四点の皮内鍼固定。

経過 二回目（三日目）治療した日はよく眠れたが、昨日はよく眠れなかった。脈は緊やや数。扁桃処置、帯脈、胃の気三点、自律神経調整処置。

三回目（四日目）眠りはまだ浅い。脈は浮、緊。胸鎖乳突筋の緊張ほぼ消失。扁桃、自律、胃経。

四回目（八日目）眠りが少し浅い位、胃のムカつき消失、眠りもよくなってきている。（睡眠が一時間伸びる。）脈は浮やや遅、緊は緩む。行間（+）。扁桃、胃経、肝実処置。

六回目（三十一日）眠りがよい。緊は消失。行間（-）扁桃、胃経。ほぼ治る。

考察 この症例は幾つかの問題を含んでいます。まず、当然そうである脈状がなぜクスリで変わっていたのか。その前にクスリは体内でどう動いているのでしょうか。

一、消化管などから血液への吸収。

二、血液の流れに乗って移動し、毛細血管を通り抜けて各組織の細胞へ広がる。

三、肝臓などの臓器における代謝分解。

四、肝臓から胆汁中へ、腎臓から尿中へと排泄。

（「薬の飲み合わせ」沢田康文著より）

体内で、吸収、分布、代謝、排泄というプロセスを繰り返しているわけです。小腸から血液に吸収された薬が肝臓を経て心臓に行き、そこから脳へ分布していった。大脳の下にある視床下部の自律神経中枢にも当然、影響を与えています。自律神経中枢を刺激し続け、その働きを攪乱した結果が仮面の脈だったのではないのでしょうか。そこで、刺鍼することによって、その刺激が末梢の知覚神経を介して、脊髄に伝わり、それが大脳、視床下部の自律神経中枢にも達し、何らかの神経伝達物質によって、本来の自律神経系のホメオスタシスが働き、その結果、脈状が緊数を打ちだしたのではないかと思われまます。治療システムでは主に神経・内分泌系に該当します。

それとクスリのことですが、この患者は六種類飲んでおります。脳循環改善剤が二種類、鎮痛薬、ビタミンB12、精神安定剤、漢方薬です。この中で、日に三回服用するクスリが四種類もあります。昨年五月に“薬”としての有用性が認められず、認可取り消

しにあった例の脳循環改善剤が二種類入っています。主作用がほとんどないということは副作用は当然あるし、残っているわけです。それからこの中のビタミン剤、精神安定剤は海外で評価されておらず、日本国内でしか通用しないクスリ（ローカルドラッグ）のようです。すべてのビタミン剤、精神安定剤をいってるわけではありません。それからこの漢方薬は正確には漢方製剤というエキス剤（生薬の有効成分を抽出し顆粒としたもの。湯剤の成分が本当に入っているのか疑問視する漢方の専門家もいる）。つまり加工しているから効き目は落ちると思われます。

これらのクスリはあまり効いてなかったのではないのでしょうか。クスリ好きという国民性の我々日本人に、副作用の少ないクスリ（つまり効き目も緩い）を出す習慣ができなかったのかもしれない。